

知識と可視性

文化人類学と民俗学における「目で見る方法」

川田牧人

Knowledge and Vision : "Way of Looking/Seeing" in Cultural Anthropology and Folklore Studies
KAWADA Makito

- ① 本稿の課題：観察の科学について
- ② 科学的方法としての観察の成立と展開
- ③ 文化人類学と民俗学における「見る」方法
- ④ アスペクトとメタファー的視覚
- ⑤ 総括と展望

【論文要旨】

本稿は、フィールドワークによって知識が獲得され形成される過程において、可視性すなわち見ることがいかに関連するかという課題を検討することを目的としている。自然科学における「客観的」観察の前提を相対化し、主観と客観の相互作用や「体化」といった側面が見いだされることに関連させて、文化人類学と民俗学の「見る」方法を考察する。その第二の立脚点は「way of looking」と「way of seeing」の対比である。前者はものの見方、観察の仕方といった具体的な方法のことであり、後者は個々の技術の背景をなしているような人間観、社会観をさしている。本稿ではこの両者の観察のモードによって、とりわけ文化人類学の観察調査が現場でどのようにこなされるかを検討する。一方、民俗学の観察の特徴として、「主観の共同性」をとりあげる。自然を観察しそこから季節の変わり目を感じたり農作業の開始時期を判断したりすることは個人的で主観的な感覚であるはずだが、その主観が一定範囲の人々のあいだで季節の慣用表現や農耕儀礼として共同化

されていることが主観の共同性である。それは同時に「見立て」や「なぞらえ」といったメタファー的視覚の生成を意味している。そこで考察の第二の立脚点として、ウイトゲンシュタインのアスペクト論を検討し、意味理解の文脈依存性という論点を導き出す。この観点から、エヴァンス＝プリチャードやミシェル・レリス、柳田國男などの民族誌記述を検討する。これらの議論を経由して、何ら先見性のない白紙の観察ではなく、むしろフィールドという場の論理としての文脈においてなされるような観察と、アスペクト転換を反映させたような把握・理解と叙述が、文化人類学と民俗学の観察法の特徴であるという帰結にいたる。そのような観察と記述のありかたから、現実と仮想が行き来する生活世界にせまる方法を吟味する。

【キーワード】 視覚の方法化、参与観察、way of looking、way of seeing、主観の共同性、アスペクト

① 本稿の課題：観察の科学について

ひとはなぜ、ある特定のものの見方をするか「わかった」と思うようになるのか。あるいは、「見る」と知識には、いかなる関係があるのだろうか。この問題について筆者は、本稿に先んじて、「目で見る方法序説―視覚の方法化、もしくは考現学と民俗学―」（川田二〇〇五）と題する論考のなかで、とりわけ考現学と民俗学の対比から考えようとした。ここでは民俗学、とくに柳田國男の「可能性の視力」について、「目で見る方法をつきつめつつ、ある地点でそれを突き抜けてしまつて見えないものに到達してしまう」（川田二〇〇五・九二）手の内を持ったものであること、しかしそれが「特異な個人体験に根ざしながら学的共有物となつていった」（川田二〇〇五・九二）プロセスについては別稿が必要であることに言及するにとどまった。目で見る方法を「突き抜ける」とは、眼前のものから「過去」ならびに「心意」に達することでもあるのだが、本稿がその「別稿」としての任にたえられるかどうかはいたって心許ない。だがさしあたってはその問題を引き取る形で、文化人類学との対比において「見る」方法を吟味してみたい。すなわち、一定の知識が形成されたり獲得されたりする際に、可視性つまり見えることはいかに関連するかという課題について、文化人類学と民俗学の方法論を検討することが、本稿の課題である。

可視性の問題のとりあげ方には、おおざっぱに言って二通りのアプローチがある。ひとつは、あくまでも方法としての観察が、いかに人類学的もしくは民俗学的知識を生成させるか、というエティクな調査論、方法論としてのアプローチである。前稿において、「目で見る方法」と銘打って検討したのは、まさにこの視覚の方法化についてであり、その時点では可視性がはらむダブルミーニングの問題について、じゅうぶん

に自覚的ではなかったことは認めざるをえない。

しかし可視性の問題にはいまひとつ、フィールドワークを実施する当該社会の住民、いわゆる当事者が彼ら自身の世界において、可視性を經由した諒解を経由してはじめてある事象を知覚したり認識したりし、さらにそれを知識化することができるようになるという、イミクなレベルでの視覚論というものがあろう。前稿の方法論的問題を継承する本稿では、この側面についてはじゅうぶん検討できる余地は少ないかもしれない。しかしフィールド科学にあつては、当事者の認識レベルと調査者の観察レベルを完全に切り分けることが困難な局面もあるし、両者の切り分けが必ずしも得策ではない場合もありうる。そこで本稿では、調査者、観察者の問題としてだけでなく、可能な限り、当事者が可視性をもちいて理解や知識にいたる側面についてもとりあげたい。

② 科学的方法としての観察の成立と展開

(一) spectacle から observe へ

ジョナサン・クレーリーはその視覚芸術・技術論において、「一九世紀における視覚イメージの規格化は、ただ単に機械化された再生産の新しい様式の一部としてのみならず、観察者の正常化^{ノーマライゼーション}と主体化のより広範な過程との関係において、考慮の対象とならねばならない」（クレーリー一九九七・三七）と述べ、「観察者」という新たな主体がたちあがることの重要性を指摘してその研究の中心に据えている。その重要性は、「観察者 (observer)」と「観客 (spectator)」との峻別によって明らかにされる。すなわち、spectacle も observe もともにラテン語起源であり、前者はスペクタクルの現場での受動的傍観を示すのに対し、後者には (一) 規則、慣例を遵守する、(二) そのルールの範囲に参加

する、という意味を含んでいるという。そのような意味において観察者は、「予め定められた可能性の集合の枠内で見える者であり、さまざまな約束事や境界のシステムに埋め込まれた存在」(クレリー 一九九七:二二)である。そして、(一)から法則性を見出す、原則を推論する、といった科学的発見への連想が働き、(二)から自らを定位するという観察の位置どりの観点が生じることを考えるならば、このクレリーの議論の出発点は、科学的方法としての観察、あるいはフィールド研究における参与観察の問題にとっても初期設定となりうるものが確認される。近代科学が成立する一般的条件として、反証可能性や数量化という条件とならんで、客観性が必須条件となる所以でもある。

クレリーは一九世紀を中心に検討しているが、それより遡ること数百年まえの近代科学成立の際にも、視覚の方法化は鍵となっていた。ただしそれは、科学的手続きにおいて対象を把握する方法としてのみならず、その思考や発見といった結果の部分をも目に見える形にして提示していく方法の考案でもあった。大林信治は、一六〇一七世紀の近代科学の成立期にあつて、コペルニクスやガリレオ・ガリレイの天文学における観測や、ボイルやニュートンの物理学における実験と観察によつて新しい法則や理論が導き出され、近代的視覚⁽¹⁾の形成が近代科学の発展を牽引してきたことを検討している。そして、実験・観察といった「見ること」が科学的知識を発見するプロセスとして不可欠な方法となつてきたばかりでなく、数量化・数学化によつてその科学的研究の成果が可視化され社会化されるプロセスとして決定的な重要性を帯びることを指摘している。大林は、「数量化と数学化は今日われわれの間に行き渡つていく科学の一つの特徴である。数量化と数学化によつて複雑な世界は単純化され、われわれに可視的なものとなる。その意味で、こんにちわれわれは基本的にはニュートンのスタイルの近代的視覚の線上に生きていくということになりはしないだろうか」(大林 一九九九:九七)と述べて

いる。

視覚によつて知識化され、また視覚によつて認識されるという近代科学の営みにおいて視覚が重要であつたのは、対象を客体化していくその作用にあつたからである。しかし同時に、観察や数量化による純然たる外部の画定は、はたして確固とした絶対的なことであるのかといった疑問は、哲学的な省察を待つまでもなく、近代科学の成立とほぼ同時期に当の科学者たち自身によつても提起されていた。名越利昭によれば、「観察者の視覚や認識能力がそれほど明晰で確固としたものでないという限界認識、見られる対象(客体)もそのままの不変的固定的存在ではなく、観察者の能動的な働きかけ(実験)や見方・解釈によつてその表象を様々に変化させることへの着目、さらに観察者自身が対象世界の一部として、その内部にとどまらざるを得ず、客体を外側から見ること自体が不可能だ」という自覚、など」(生越 一九九九:一四七)の考察は、一七〇一八世紀における「観察者」視点の成立に際して重要なインパクトをもつて

いる。たとえばフランシス・ベーコンは、自然界を認識するだけではなく、世界をその内部から変革し人間の利用に供するための実践的「操作」としても近代科学は作動するのであつて、「観想と活動」の両面が重要になると考えた。主観と客観の相互作用に対する着目であると考えられるが、この段階では視覚優位の立場が重視され、観察者は「自然的世界とは独立した存在として、対象を確実に客観的に見ることができるという確信に支えられ」(名越 一九九九:一五四)ていた。ところがジョン・ロックは、観察とは、外的な知覚可能なものに対する「外部観察」であると同時に、自ら知覚し内省する心の内的作用に対する「内部観察」でもある、という観点に立ち、観察による認識は絶対的真理に到達するのではなくあくまでも「蓋然性」の範囲にとどまること、「内省」によつて外的観察とは別の観念を形成しうることなどを主張した。この「自己観

察」をさらに推し進め、シャフツペリーは「感覚」、「感情」、「想像力」による直感を、観察に勝るとも劣らぬものとして位置づける。この直感には、観察者と対象世界は完全に一体化したものであり、観察者は自然を内側から見ることにより、それとの純粹な同化を果たした「自然との一体化」状態においては、客観的観察以上の効力を発揮することもありうるという。

このように、主観から完全に分離された客観性を打ち立てるために重要であると考えられた視覚の方法化は、主観と客観の相互作用、さらには主観と客観の一体化といった議論にまで展開する。そして、「西欧近代において自然的世界についての「外部観察」から出発した観察者視点とは、「内部観察」自己観察」として発展・深化し、さらに社会的相互作用による「自己相対化の視点(視覚の社会化)」に到達する」(名越一九九二:一七三)。つまり見るものと見られるものとの関係は固定されておらず、主観と客観の相互関係が重要になるという指摘であり、さらにその根本には、「見る」という方法は対象を外在的に指定する機械的な手続きであるとはかぎらないという可能性も検討の余地を生じさせることとなる。

以上のように、近代科学の成立時期を前後して観察⇨視覚の方法化を検討すると、人文社会科学、とりわけ文化人類学や民俗学でよくいわれる観察論ときわめて近似した論点があがえる。すなわち、たとえば参与観察についてわれわれは、人が人を観察するのであって、自然観察のように対象を完全に客体化しきった状態でおこなうことはできない、といった教えを受けてきた。しかし上にみたように、近代自然科学における「観察」も必ずしも対象を観察主体から切り離して認識していたばかりは言えず、その初期からきわめて「参与観察」的な傾向があったことがわかる。さらに、主観と客観の相互作用や自己観察といった指摘は、近年の文化人類学における「内省の人類学」にも通じるところがあるよ

うに思われる。そこで、文化人類学と民俗学における観察の方法の具体的検討に入る前に、「内省の人類学」についてもその概略をみておこう。

(二) 観察の科学としての「内省の人類学」

「内省の人類学」とは Reflexive anthropology の訳語であり、通常、次のように定義される。「リフレクシヴィティ (reflexivity) とは、調査している研究者が自分を他者とみなし、自分自身を観察の手段として意識することですが、いいかえれば、それまで問題にされてこなかったフィールドワーカー自身の姿というものを民族誌のなかで露に示し、その属性と個性というフィルターをとおしてデータが集められ解釈がなされる過程を明確に意識し、そのことを書き込むという民族誌記述の方法のことです」(松園二〇〇二:二三)。すなわちリフレクシヴィティとは、調査と記述の実践において自己をいかに反映させるかという自己投影法とでもいうべきものであった。民族誌論がさかんに論じられた一九八〇年代にあつては、たとえば、対象社会の人びとを外側から客観的に叙述するだけでなくそこに介入するフィールドワーカー自身を描き込んだ「一人称民族誌」や、インフォーマントとフィールドワーカーの対話的交渉によって民族誌的認識が生成するという前提にたつて、一連の対話として提示される民族誌などの試みもみられた。また、そのような共同作業として民族誌が生成するというプロセス自体を反映して、フィールドワーカー単独のオーサーシップがクレジットされるのではなく、共同テクストの形で民族誌を世に問うというスタイルも考案された。これら一連の動きは、「実験民族誌」というまとまりにおいて、さまざまな民族誌スタイルの考案との連動のなかで議論がなされていた。

したがってリフレクシヴィティの問題は、ここでの視覚の方法化という課題に引き寄せていえば、自然科学における「観察」を人類学における「参与観察」に展開させるときに通過すべき論点であり、一面ではき

わめてテクニカルな議論であったはずである。ところが、その後の民族誌バッシングの時代にあつて、リフレクシヴィティの議論は現場での知識の生成プロセスの議論から、フィールドワークの政治性の問題や見る者と見られる者とのエシカルな関係性の問題へと変質していく。とりわけ日本では「内省」という訳語が与えられたため、民族誌バッシングの時代の自己反省モードともいえるべきものと接続していったのではないかと筆者はみている。もちろんフィールドにおける知識の生成の問題は、見る者と見られる者との関係性などの問題と無縁ではなくむしろ密接に結びついているものであるが、であればなおいっそう、現場において「見る」ことがいかに方法として成り立つかという議論をもなっているべきであろう。

もつとも、このような杞憂をかき消すような研究成果も少なからず見いだされる。たとえばシャルロット・デイヴィスは、「リフレクシヴィティとは、広義に定義づけられ、自己への立ち戻り、自己言及のプロセスのことである。社会調査の文脈においては、リフレクシヴィティはもつとも直接的で明瞭なレベルにおいて、調査の成果がその実施者と調査過程に反映されることを意味する」(Davies 1999:4)とのべ、上記の松園に近い立場から、民族誌の営みを総合的に検証しなおしている。⁽³⁾ そこでとりあげられるリフレクシヴィティと知識の問題も徹底しており、知覚する主体がその知覚のプロセスをリフレクシブであることに自覚的になつてはじめて、知るといふプロセスは完全にリフレクシブだと言える、という立場をとる。そしてこのような自己言及性を極限まで推し進めた状態を、「ラディカルな構成的リフレクシヴィティ」(Davies 1999:7)と称している。

文化人類学における観察調査においても主観と客観の相互作用、見る者と見られる者の関係性が重要であることを概観した。そもそも観察主体がその客体と完全に分離されていると考えられがちな自然科学におけ

る観察法においても、近代科学の成立において両者の関係性が問題視されてきたのであるから、人間が人間を観察する場合、両者の関係性はおさら重要性を増すにちがいない。しかし本稿では、視覚による方法学的方法として吟味する必要性から、自然科学における観察法を対照したのであつた。そこから得た帰結、すなわち「見る」ことはそれ自体が独立した営為であるというよりも、見られる対象との関係性の上に成り立っている行為である、という観点をふまえ、次に観察調査法についてじつさに検討していこう。

③文化人類学と民俗学における「見る」方法

(一) way of looking & way of seeing

筆者は本稿に先立つ論考(「目で見る方法序説」)において、従来の「参与観察(participatory observation)」論は「参与」のほうによりウェイトがおかれている現状を指摘し、「参与(観察)」論から「(参与)観察」論へのスライドは可能か、といった問題を設定した。観察調査法の中に立ち入って検討するためには、この立脚点は引き続き有効であろう。「見る」ことの方法化を検討するにあたり、ハリー・ウォルコットによる民族誌的ものの見方に関する議論は示唆に富む(Wolcott 1999)。以下この項では、民族誌を「way of looking」と「way of seeing」という二種類のモードにわけて考えるウォルコットの論考をたどってみたい。まずこの二種類のモードは大雑把に区分して、「way of looking」とはものの見方、観察の仕方といった意味であり、かたや「way of seeing」とは物事のとらえ方といったより広い認識をさす。民族誌する(doing)こととは「way of looking」も「way of seeing」の両方をともに実施することであるのに対し、民族誌的方法を借用する(borrowing)だ

けなら「way of looking」のみでも事足りりとする。日本国内においても近年、「フィールドワーク」や「エスノグラフィ」といった語は本家である文化人類学の領域をこえて、臨床の現場にたずさわるさまざまな活動でも広く用いられるようになってきたが、そのような分野で注目されるのは「way of looking」なのである。

とはいうものの、「way of looking」とは、あるときには「参与観察調査」、またあるときは「記述的調査」、「博物学的調査」、「質的調査」、「現地調査」、「フィールド研究」などなど、さまざまな呼称を与えられるような、民族誌家や現地調査者がフィールドで実際におこなうことの一一切合切をひっくるめて示している。それは「way of looking」が民族誌的営為の方法的な部分に特化した特徴であるからである。この方法論について詳細に検討してみよう。

まず民族誌調査の営為は、参与観察調査、インタビュー、文庫作業という三つの要因にカテゴライズされる。そしてそれぞれは、経験化、問い直し、検証という活動ラベルが付される。経験化の段階にあつては、あらゆる感覚を通した情報が含まれるはずだが、自ずと視覚ならびに聴覚からの情報が中心となる。味覚、触覚、嗅覚などの感覚を記述する方法はたち遅れており、それらを記述する際には個人的経験の類比によってなされることが大半である。先に見たように、諸感覚を統合するものとしての視覚の中心的位置づけが揺らぐとき、経験化は重要性を帯びるのである。第二の問い直しとは、経験化が受動的観察者によって成り立っていたのに対し、能動的観察者を想定する。すなわち実際に質問を発し、みずから対象社会の活動や対話の世界に乗り出していくからである。そして第三の文庫作業による検証とは、他の調査者によって制作された資料に注意を払いそれを利用していくことである。その意味では図書館や文書館のみの作業ではなく、手紙や日記、写真、画像などフィールドで得られる資料も含まれる。

これら三つの活動ラベルは民族誌的調査の目録の体をなすが、視覚感覚との関連性という点では、やはり第一の経験化の段階が着目される。この段階は、民族誌調査のみならずあらゆる質的調査に共通して、記述・分析・解釈という三つの側面が含まれており、これらの三つの側面はデータの扱いという点で対比的である。すなわち記述とはデータを提示して説明の基礎を築くことであり、分析においては事実、数値、発見などを報告するために合意の得られたやり方でデータを吟味し、そして解釈ではデータの意味産出をおこなって分析された事実を議論によって封じ込めないようにするという。これらの側面にあつて参与観察を通した直接的経験は出発点であると同時に、調査者が観察したありのままの意味をなすように、観察された以外のものがふるいにかけられるフィルターとしての機能も持つ。つまり記述・分析・解釈という一連のプロセスが視覚感覚と直結できるのは、「way of looking」という経験によるものである。この意味で、「way of looking」はマニュアル的方法以上のものである。

いっぽう、「way of seeing」は、民族誌する (doing) ことの必須要件としてあげられており、方法以上のものである度合いはさらに増す。たとえばロールシャッハ・テストの際、検査員はカードを見る (look) ように指示するが、それをどのようにとらえる (see) かは、被験者次第である。その人物が人間の社会的行動の見方、あるいは一定の社会観や人間観を共有した民族誌家であれば、その民族誌家が何を (どのよう) とらえるかは、何をどう見るか (「way of looking」) を超えて議論されなければならない。見る (look) を超えてとらえる (see) こととは、民族誌的課題をいかに構成すればその記述が動植物分類の一覧表のようなものではないものになるかについての感覚をそなえることである。より具体的にいうならば、特定の場所や地位の人がいかなる行動をとるか、そしてその行動にいかなる意味を付与するか、それは通常の場合と特殊

状況のもとでは同じかちがうか、そしてそれらの行動の累積が規範の形成に向かうかどうか、といった関心に裏打ちされた社会的行動の観察は、民族誌を「方法以上のもの」とするのに利するわけである。

ウォルコットのこの対比は、観察の個々のテクニックと、その技術を支えるいはより大きく包括する人間社会に対するビジョンと言いかえることもできよう。「way of seeing」はウォルコットだけでなく、たとえば映像人類学者のアンナ・グリムショウもその著書の副題に用いている。そこで提唱される文化人類学における「ways of seeing」(グリムショウの場合は複数形を用いる)の独特なやり方とは、

(一) 視覚は現代の民族誌実践において、方法的ストラテジー、技術として機能する。

(二) 視覚は、世界を知る特定のやり方、いわゆる知識のメタファーとして機能する。

という二点に特徴的である[Grimshaw 2001:7]。この二つは「seeing」というひとつの語を用いながら、「way of looking」と「way of seeing」をより統合的にあつかっている。すなわち、(一)ではより個別論的な観察技術・技法が対象化され、ウォルコットのいう「way of seeing」により近い世界観・社会観といった意味合いでは、(二)の「見る(こと)」が世界把握のメタファーになりうるという指摘に近似するのである。

(二) 参与観察における「技法」

前項の最初に述べたように、民族誌的方法を借用するだけでなく、本格的に民族誌する⁵⁾には、「way of looking」と「way of seeing」の両方が必要であることは、いくつかの議論を喚起させる。ものを見るときははまったく先入観のない状態でただ見るということは不可能で、多かれ少なかれ何らかの先入観にとらわれての観察しかなきではないのか、といった問題も提起されよう。それはまた、何らかの社会観・人

間観を脱色した技術論として「見る」ということを論じることは可能か、といった問題も引き出してくることになる。それは人間の「見る」という知覚行動一般についても妥当することかもしれないが、文化人類学や民俗学における観察調査のやり方という、より限定された技術論についてはさらに深刻な限定を設けることになるのかもしれない。

そこでここではより具体的に、観察調査の「技法」としてどのような内容が列挙されるのか、実演的に示してみたい。その際、前項で検討したウォルコット自身の著作のなかからも純粹に「技法」として語れそうな部分を抽出し、その他、民族誌方法論のテキストなどを参照して、具体的な「べし」集のような形式を仮設してみる。⁶⁾

A. 基本的視覚情報の収集

(一) セッティングの観察・調査にとつて潜在的に重要と思われ、研究に関連した行動・活動が展開する場所を定めること。現地のキー・インフォーマントといっしょにその場を歩くことによつて得られる聴覚情報を含む。

(二) 出来事(のシーケンス)：単一の活動が連続して一定の規模と長さをもつた、ひとつづきの活動。二人以上の人物に意味が共有されている、来歴と結果をもつ、繰り返される、などの特徴をもつ。⁷⁾

(三) 数とり、統計調査、マッピング：フィールドワークの初期段階で、人と場所、行動の相関関係をより正確に得るための諸観察を反映させたもの。数とりは出来事や活動を正確に記述するために必要な、物質文化、場所などの計量化を意味する。統計調査は調査地のセッティングにおいて調査者の関心を引く人、世帯、その他のものについて一覧表化すること。マッピングは実際に社会行動がなされる場についての図像化である。

(四) 社会的差異を示す(社会経済的もしくはその他の)指標・調査の重要な構成要素である社会的差異を明らかにするために、着ているもの、髪型、装身具、言語と話し方、視聴番組、車、居住地など、観察が比較的容易なものに着目し、そこから社会階層や社会経済的地位を推論する [Schensul, Schensul and LeCompte 1999: 91-114]。

B. 行動観察記録

(五) 行動の(差異の)記録・調査者の前で人びとが(いつも)ちがったように行動すれば、後の質問調査の材料になりうる。質問への別の観点の組み入れ、組み直しをおこなって、観察の精度を可能な限りあげられるようにすること。

(六) 理想型の抽出・人びとが最善だと思う行動形態から、社会生活にとって何が理想とされているかについて観察すること。

(七) 規範と現実のズレ・人びとがなにを言ったり行なったり「すべき」だと考えているかと、「じっさいに」言ったり行なったりしたこととの差異を見出すように観察すること [Wolcott 1999: 49]。

C. 観察記録作成上のその他の留意点

(八) 当事者にとっての意味・たとえば「会議中、伏し目がちにそわそわとエンピツをいじくり回す」という行為は、退屈、不同意、理解不足、怒り、欲求不満、気移りなど、多義的である。調査者は行動そのものは記録しても、性急な意味付与をフィールドノートに書き付けない。

(九) 主観的評価を除外した観察記録・人物についてはその外見、すなわち着ているもの、靴、荷物、その他の携行品などを詳細に記録し、「貧乏でだらしないさそうな」といった記述者の評価を含んだ表現を避ける。出来事の起こった場の状況についても同様に、「カメラ

のレンズを通したように」記述すること [Schensul, Schensul and LeCompte 1999: 114-120]。

このようなリストアップは、どこまで継続すればフィールドワークの実際に耐えられる調査項目となるのか判断しにくく、また続けていけばきりがなくなるであろう。一般に調査項目をより詳細にすればするほど、煩雑さと非体系性を併発し、「科学的」観察のイメージとは次第にかけ離れていくといった事態も生じうる。そのような難点を退けつつ、ここで浮かび上がった観察調査のねらいや実際のターゲットなどをあえて前項の対比に引き寄せて考察するとすれば、たしかに「way of looking」と「way of seeing」の交錯地点に参与観察の技法が成り立っていることをうかがうことができる。その際、「way of looking」すなわち具体的に「見る」という働きかけが向けられる対象としては「行動」が重要視される。いっぽうで、「way of seeing」すなわち個々の観察行動の背後にあるより大きな指向性として、「社会」に対してウエイトがおかれていることが確認できる。

(三) 主観の共同性⁶⁾

前項の考察から、観察調査において「カメラのレンズを通したように」現象を観察する場合でも、人びとの行動の背景に一定の社会性を指向する様態を見ようとする傾向性が介在しているのではないかという仮定が成り立つ。ここには、視覚がある特定のものへの指向性を持つということとはバイアスや先入観と関係があるのかどうか、また、そもそもあらゆる指向性を排除した視覚というものがありうるのかどうか、という両極に問題を展開させることになる。この問題を掘り下げるために、次に民俗学における「見る」方法にもふれたい。そのなかでもとくに、「カメラのレンズを通したように」といった客観的外在的視覚ではなく、対象

社会の人びと自身の視覚感覚が、研究上のそれとどこかでシンクロしてしまうような局面についてとりあげたい。

そのような主観と客観が混在するような視覚について論じているのは高取正男である。高取は、民俗的自然認識のあり方について、民間暦が発達したり農事に関する慣用表現が生まれたりすることを取りあげ、「農民たちがながい自然観察の結果を圧縮したものとして、いちいちもつともである」(高取 一九九五(一九七五)・一七三)と述べる。しかしそれらの観察やその表現がまったく客観的な自然観察と同様のものであるかという点、たとえば子どもが空の雲を「イヌに似ている」、「自動車に似ている」というように身近な物体になぞらえて認識するのに近く、厳密な客観性が認められるものではない。とくに表現の仕方が主観的であり、誰が見てもイヌや自動車のかたちに見えるわけではない。ではなぜそれが特定の民俗社会では民間暦や農事暦になりうるかという点、「まずは村の人の心のなか、その共同の主観のなかに春がしだいに育ってきていることがすべての前提となる。そうした主観の暗黙の一致のうえに、客観的な自然現象が指摘され、このふたつが感応しあって、その現象に意味がつけられ、農事開始の宣言となる」(高取 一九九五(一九七五)・一七五)というプロセスをたどる。ここで重要なのは、「共同の主観」とか「主観の暗黙の一致」という概念である。上記の引用ではさり気なく書かれているが、民俗の自然観察は科学的自然観察とは異なり、数値や専門用語で示されるわけではなく「春が来た」という感覚であるから、それを第三者と共有することは相当にむずかしいはずである。ただ完全に個人的な感覚というわけでもなく、もとより春の到来を感じる感覚的イデオロムのようなものが共同化されている場合、「共同の主観」や「主観の暗黙の一致」によって相互了解される可能性はある。そのような感覚的イデオロムが共有される範囲が民俗社会であったと考えると、その範囲において共有される主観と、事実としての自然現象の「感応」、あ

るいは「人の心と外界の現象、主観と客観の微妙なふれあいのうえに構築されている」のが「フォーク (Folk)・常民・民俗」の論理」(高取 一九九五(一九七五)・一七五)であったという説明にも、それなりの説得力をみとめることができよう。

もともとは「曖昧模糊」とした認識世界において成り立っている民俗的自然認識は、「見立て」や「なぞらえ」などの技法によって個々に表現される恣意的、主観的なものであるようにみえるが、感覚的イデオロムが一定の範囲において通用すると考えることによって、それが「共同の主観」を形成しているということは、以下の論点を引き出す。①「曖昧模糊」とした認識世界と、そこでの観察の問題。通常、観察には明確な視点が必要なはずであるが、曖昧な認識のもとでも可能な観察というものはいかなるものか。②観察された結果の表現技法の問題。恣意的、主観的といってもまったく個人的なものではなく、表現の仕方に共同性があったり一定範囲の人びとをして理解可能ならしめている場合、その表現の要にある「見立て」、「なぞらえ」といった技法とはいかなるものか。③観察と表現の技法における主観と客観の乗り合わせの問題。この問題は、当該社会の住民自身による可視性を經由した認識の生成(高取の言う「フォークの論理」と、それをリフレクシブに認識する調査者の側の可視性の問題(「フォークの論理」に対応させるならば「フォークロアの論理」ということになる)が、じつは二重構造になっているという問題でもある。

まず①については、科学的自然観察に要求されるように主体と客体はつきりと二分されるような(したがって明晰な)認識を生じさせるのとは別種の可視性を想定しなければならぬ。人間の精神と肉体、あるいは自然と超自然といった近代的二分法が必ずしも妥当性を確保できないのと同様に、環境世界と人間という対置もまた民俗的自然認識にはそぐわない。あるいは、民俗的自然認識とはそもそも、人間と自然を明確

に對置させるような類のものではなかったと考えられるかもしれない。上記の引用においては民俗の自然觀察が中心に論じられているが、高取はその直後に、宮本常一による直接民主制的な合議の事例（『忘れられた日本人』中の「対馬にて」で叙述された有名な事例）を引いて、社会と個人という対比においても同様の論を展開している。すなわち村寄合において、人びとの共同意識と個人的経験を行きつ戻りつしながら徐々に合意形成がなされるという社会的側面にも、西洋近代的主体としての個人ではなく、個と共同、主体と客体が相乗りしたような民俗社会の大前提が焦点化されることを指摘し、それを「ことよせの論法」と呼ぶのである。要するに近代的二分法でたちあがるような主体と客体との関係がかならずしも成立していない状態でも、視覚の有効性が発揮されるということだ。これは前節で、自然科学の世界にあっても、主観と客観の相互作用、さらには主観と客観の一体化といった議論がみられたことを考慮すれば、むしろ当然だと言えるかもしれない。

つぎに②点めであるが、「主観の共同性」が認識そのものの共同性（インプリント時点の問題）というより、表現技法の共同性（アウトプリントの局面での共通様式）が問題であるとすれば、「見立て」や「なぞらえ」がいかにしてなされるかを検討しなければなるまい。それは見立てたりなぞらえたりする際の表現に一定の規約があるからなのか、見立てられたもの、なぞらえられたものを解釈するやり方が規制を受けるからなのか、といった問題でもある。さらにそれが、当事者レベルにおいて知識を獲得する際に可視性が重要であるという議論と、調査研究のエッセイックなレベルにおいて重要であるのか、という論点③については、問いを別にたてる必要があるかもしれない。

これらの問題を掘り下げるために、次節では主に「見立て」や「なぞらえ」といった視覚作用がフィールドワークにいかに関連しているか、またフィールドワークの営為の中にそれらの知覚がいかに見出せるか、

などについて検討を加えたい。

④ アスペクトとメタファー的視覚

（一）ウイトゲンシュタインのアスペクト論

「見立て」や「なぞらえ」が介在する知覚—表象—解釈という一連の流れにおいて、主観の共同性が発生する地点はどこなのか、あるいはそもそも、発生しているのだろうか。前節の問題をこのように展開しようとするとき、「見え」と解釈の問題を集約したようなウイトゲンシュタインのアスペクト論を経由しておくことは有益であろう。

アスペクトとは、ウイトゲンシュタイン自身のことばでは、次のように説明される。「われわれはまたこの図形を、あるときはその一つのもの、あるときは別のものとして見ることができる。—それゆえ、われわれはこれを解釈しているのであり、自分たちが解釈するようにこれを見ているのである」（ウイトゲンシュタイン 一九七六・三八四）。「この図形」というのは、あるときにはアヒルに見える、また別のときには（あるいは同時に）ウサギに見える、有名なジャストロウ図形のことである。ウイトゲンシュタインの上記の引用が示しているのは、アヒルに見えたりウサギに見えたりするのは、見る人がアヒルとして解釈したりウサギとして解釈したりしている、ということである。

またアスペクト知覚の問題は、その知覚行為の共同性にも関連している。次のウイトゲンシュタインの引用をみよう。

「見る」という語の二つの適用例。

その一つ。「何をあなたはそこに見るか」——「わたくしはこれを見る」（そこからある記述、ある素描、ある模写が続く）。もう一つ。「わたくしはこの二つの顔に類似を見る」——このことをわたくしが

報告している相手が、これらの顔をわたくし自身と同じようにはっきり見ていなくても構わない。

重要なのは、見ている二つの〈対象〉のカテゴリ上の区別〔ウィトゲンシュタイン 一九七六・三三三〕。

一つめの適用例においては、「あなた」と「わたくし」は共同して何らかのものを見ている。であるから記述や描写が受け入れられるのである。しかしもう一つの適用例においては、「あなた」がそれを見ているかどうかは問題ではなく、「わたくし」にとつてどのように見えるかが問題の中心をなしている。そしてもう一点、見ている対象物が同じかちがうかというポイントがある。

たとえば、「リングが見える」というのは通常の知覚の言明であり、AさんとBさんは同じひとつのものをみてそれをリングだと認めるということである。あるいは両者は同時に見えない場合でも、行為者が交代すれば同様の知覚が得られることは前提されている。このような場合、通常の場面では「リングがある」と表現されることもしばしばあるように、存在と知覚は重なっている。しかし「リングに見える」といった場合、AさんとBさんが同じように見ることはどこにも担保されていないし、見ている対象物はリング以外の何ものである。存在と知覚がずれているわけである。

したがって、このような二種類の見え方のちがいは解釈の問題が介在する。野矢茂樹によれば、「○○が見える」では対象が表象されているのに対し、「○○に見える」では意味が表象されているという。アスペクト報告の特徴である後者の見え方は、○○が何であるかわかっているというだけでなく、○○以外にも見える可能性があることの表明である。前者の場合、他のアスペクトの可能性が意識されない「単相状態」であるのに対し、後者は別のものに見えるかもしれないという他のアスペクトの可能性を示唆する「複相状態」である〔野矢 一九九五・二四〇〕。

このような意味のパラレルワールドともいうべき状態は、別にジャストロウ図形を目にしたときでなくとも、複数の主観による「価値観のちがいが」という事態においても日常的に経験されるものだという⁽⁸⁾。複数の解釈の可能性があるとき、たとえばアヒルとウサギの解釈の可能性の中で、「アヒルとして見る」とは、その図形をアヒルとして認識する文法のもとに把握する価値観の表明であるという点で、アスペクト論はきわめて規則論でもありうる。

これに対し野家啓一は、「観察の理論的負荷性」の点からアスペクトを論じている。観察の理論的負荷性とは、見ることが先行し分析や考察が後継するという継起的操作としての観察を否定し、「観察、事実、データなどに対する理論や知識の認識論的先行性を主張する科学哲学上の概念」〔野家 一九九三・二三九〕のことである。この見方によると、科学的な観察や実験でさえ、そこから得られる帰結はあらかじめ知られているということであり、さらに極端に推し進めると、あらゆるものは見る前にそれが何であるかわかってしまうということになりかねない。少なくとも本稿で問題にしているような観察調査の場合、観察によってデータ収集がなされる前に、どのような対象がデータとして有効であるか、あるいは対象をいかに見ればデータとして認識されるかといった諸前提が事前に与えられていなければ観察調査が実施できないといった事態も起こりえることを意味する。そうだとすれば、その観察調査に先立って何がどのように見えるかもあらかじめわかかってしまっている、という極論にまで達してしまふ可能性も出てきってしまうのである。

しかしここでは極論にすすみがちな方向性を軌道修正し、「○○に見える」、「○○として見る」ということの本義にふみとどまりたい。アスペクト知覚を成立させているのは、「見立て」、「なぞらえ」などいわゆるメタファー的視覚でもあるが、同時にまた、それがおかれた「文脈」によって顕在化する「内的関係」を見いだすことにほかならず、この文

脈は想像力や表象力によって創設・補完・転換される。「文脈」とは「規則が機能すべき〈場〉の謂にほかならない」〔野家 一九九三：二五七〕ので、先にあげた野矢の指摘にあったアスペクト知覚の文法的規則の側面も含み込んで、いわば規則論と知覚論の共有地として「観察の理論負荷性」を取り扱うことが可能となる。あるいは「観察の理論負荷性」を「意味理解の文脈依存性」とおきかえて考えれば、フィールドワークにおける観察の問題とも交差する主題として何ら唐突さは感じられなくなるであろう。

アスペクト論を経由して考えたいのは、ひとつは野矢の指摘から、「複相状態」、つまり視覚によって対象を把握する経路が複数の可能性をもつこと、そしてその複数の可能性が生じる根源に主観性の問題があることである。いっぽう野家の指摘からは、あらかじめ見るべき対象がわかっていること、すなわち科学的観察が先行する理論に依存することであったが、フィールドワークの観察調査においては「文脈」の問題としてとらえられる。ある社会的行為が進行する〈現場〉での観察のあり方は、たとえば無菌室での観察などとは異なり、その場でしか発生させない視覚を生じさせたり揺らぎを招き込んだりして、その場に埋め込まれた観察となる。そのような状況を、実際に書かれた民族誌記述を以下にとりあげて検討することにした。

(二) スライド写真技法と演劇的オカルティズム

既存の民族誌の記述を吟味して、そこからフィールドの現場で用いられたであろう視覚の方法を検討する作業の好例として、クリフォード・ギアーツの『文化の読み方／書き方』（原題 *Works and Lives: The Anthropologist as Author*）〔ギアーツ 一九九六〕があげられる。この著作の三章「スライド写真技法」では、英国人類学のなかでも屈指の民族誌家であるエヴァンス・プリチャードの技法が検討されている。ここ

でその記述についてとりあげるのは、前節で指摘した「意味理解の文脈依存性」、あるいは現場の文脈によって揺らぎを招き込むような記述に對して、ひとつの明確な対照を示すことになるからである。おそらくギアーツ自身も、エヴァンス・プリチャードに一章を割いて検討したかったのは、そのまったくぶれない確固たる立ち位置についてであっただろう。

彼の五つの主要民族誌を検討して、その記述スタイルの単刀直入な明快さ、明晰さが大量に連続してひとつの民族誌作品に次々と書き込まれていくことに、ギアーツは驚嘆を隠さない。そしてこのような確固たる自信に裏打ちされた他者表象を「スライド写真技法」と名づけるのである。「彼はどのようにそうしているのか。民族誌的解明と主な説得力の源泉へのEIPの接近法の著しい特徴は、文化的現象を眼前に髣髴させるように鮮明に表現しうる卓越せる描写力―隠喩的に言えば人類学的スライド写真技法―である。では彼は何をしているのか。この幻灯機式民族誌の主な効果、および主な意図は、われわれが本能的に頼っている既存の社会的認識の枠組が、例のスライド写真技法が映し出すやもしれぬいかなるたぐいの奇妙な現象にも十分適合しうることを証明することである。」〔ギアーツ 一九九六：九一―九二〕

じつさいエヴァンス・プリチャードの民族誌には挿絵、写真、素描、図表など、視覚に訴える資料もふんだんにとり入れられている。しかしそれにもまして、言語によって叙述される民族誌事例が、映像のシーンのように彷彿とされる視覚効果は、彼の民族誌において「一見して奇怪な―非合理的、無秩序的、異教徒的な―観念、感情、慣習、価値観その他から奇妙さを剥ぎとること」〔ギアーツ 一九九六：九九〕に大きく貢献しているという。あるいは、「彼らがわれわれと相違している点は、それらがどれほど衝撃的なものであっても、本質的にはさして重要ではない、というメッセージ」〔ギアーツ 一九九六：一〇一〕を伝えるため

には、視覚的効果が有効であることをありと示している。つまり異文化のエキゾチズムがとりたてて騒ぎ立てるほどでもない当然さと親近感をもっていることを示すために、視覚の方法が用いられるというわけである。

したがってエヴァンス＝プリチャードによる文脈への依存とは、現場そのものの文脈というより、ギアーツがいみじくも言い当てているように「本能的に頼っている既成の社会的認識」ではないかと思われる。それゆえに彼の記述は揺らぎの少ない、確固として自信に満ちたものになるのだ。

これに対して、ミシェル・レリスの「ゴンドルのエチオピア人にみられる憑依とその演劇的諸相」という民族誌は、かなり趣を異にしている。エチオピアにおいてザールと呼ばれる精霊が人に憑依する現象がみとめられ、ある種の病気を治療するための憑依儀礼を演じる。「演じる」というのはこの憑依儀礼が多分に演劇＝見世物の要素を含んでいるからで、精霊ザールの憑依者は憑依するザールの種類ごとにキャラクターが転換し、そのたびごとに憑いた精霊と同一視される。また憑依は自発的にとというよりは周囲に促されて、娯楽を提供するような雰囲気のもとでおこなわれることも、「演劇的」である所以である。

演劇的であることは直ちに虚偽の儀礼であるということの意味はない。当事者自身が憑依の真实性を確信する場合があり、レリスはそれを「生きられた演劇」とよんでいる。総じて人為的手段の介入する余地が少なく、また見物人の目を気にしないものは、これに相当する。それに對して「演じられた演劇」とよばれるものは、疑いを生じさせやすい演技である。「憑依が嫌疑をまねくのは、とくに、それが、想像力を刺激し、人を魅惑するのにふさわしい演劇的な形式をとるかぎりにおいてのこと」のようにある。憑依者の踊りとグリといったような、ショー的性格を持つ慣習は、ある種の信者たちの眼には、疑わしいものと映るようだ」（レ

リス 一九八六：二四三）。グリとはトランスに入るための典型的な手段であり、激しい動きと騒がしい息づかいをともなった定式化された行動形態のことであり、それが顕著な儀礼の様式にのっとっているがために、人の目につきやすくフェイクではないかという疑いを招き入れてしまうのである。

厄介なのは、憑依する当事者にとっても、それが「生きられた演劇」なのか「演じられた演劇」なのかを峻別するのが困難だという点である。「真正のもの」といいうる憑依（自発的なものでも、よびおこされたものでもいいが、但し宗教＝呪術的環境で生じ、そのような意味づけを持ち、トランスが患者の側の意識的決定に左右されることのない、誠心誠意のもの）と、それとは反対に、真正ではないといいうる憑依（注目を集めるために、あるいは他人に圧力をかけて、物質的あるいは精神的利益を引き出すために、わざと行なう見せかけのもの）とのあいだには、余りに多くの中間的段階があつて、実際には境界を引くことはむずかしい（レリス 一九八六：二四七）。またその演劇を見守る会衆（見物人）の役回りも、「その一瞬一瞬において、憑依に陥ち入る可能性があるものであり、なにはともあれ、拍手や歌によって精霊たちを呼び出すのに参加するのみならず、一たび彼等が降りるや、彼等の化身となつている人々から遠ざけられるところか、彼等とかかわりを持つ点からみて、この見物人は純粹の観察者ではけつしてありえない」（レリス 一九八六：二四九）という記述にもみられるように、決して固定されていない。この憑依儀礼においては、そのパフォーマンズの意味づけも「生きられた」と「演じられたもの」とのあいだで揺らぎ、見るもの―見られるものの関係もじつは揺らいでしまう。そしてこの「見るもの―見られるもの関係」は、民族誌のなかの憑依者と見物人というだけにとどまらず、ザール信仰の当事者とそれを見るレリス自身という関係でもあり、当事者たちが演劇の真偽の見きわめに戸惑いをおぼえる様態が、上記の引用に見られるよ

うに、民族誌記述そのものにも揺らぎを与えてしまう結果として、エヴァンス・プリチャードでは決してみられないような記述スタイルがとられることになる。いうならば、ジャストロウ図形が反転する知覚を引き起こすようなアスペクト転換が、幾重にも折り重なりながら符合しているのである⁽¹⁰⁾。

(三) 柳田國男の景観描写^{アスペクト}

前項におけるエヴァンス・プリチャードとレリスの対比から示唆されるのは、「way of looking」の厳密な「way of seeing」のあいまいさといえるだろうか。あるいは、社会的イデオロギーの明確さと、オカルティズムの不可解さだろうか。いやむしろ、アスペクト知覚による観察として読みとることはできないだろうか。しかも前項の終わりにとりあげたレリスの視覚は、憑依を演劇と「見立て」、あるいはその真偽について棚上げすることであったが、そこには民族誌家によるものだけではなく当事者たちによるものも含まれており、両者が反転図形を示しながら記述のなかに潜んでいることを暗示していた。それは③でとりあげた民俗学的観察、とりわけ主観の共同性の問題にも示されていた。そこで最後にもう一度、民俗学的観察にもどってみよう。

柳田國男の視覚の方法については、佐藤健二『風景の生産・風景の解放』〔佐藤 一九九四〕にくわしく、そこには新たに付け加えるべきことは何もないかに見える。とくに、その視覚の方法が以下の三つに整理して提示されているのは、非常にわかりやすい。

- (一) 関係性論理を拡大する観察、あるいはエコロジカルな視覚。
 - (二) 生活様式へ遡及する観察、あるいはソシオロジカルな視覚。
 - (三) 新経験を擁護するような観察、あるいはヒストリカルな視覚。
- たとえば柳田の風景描写の実際の記述を横においてみると、そのピクチャーアップがいかにランダムであったとしてもこれら三点の特徴がほぼ確認

できる。

「ところが又何年か過ぎて後に、八ヶ嶽の東麓を信州から南へ越えようとして、野辺山が原の一角に於て、再びやゝ小規模の、是を思ひ出させるやうな家居を見たときに、何と無く原因が見つかった様な気がしたのである。これらの楊の老木は勿論栽えたものではない。昔から群をなして此あたりには繁茂して居たのを、少しばかり伐り残して其間に小屋を掛けたのが、後には親しみを生じて其長大を念じ、道路を開くにも新屋敷の地割りに、程よい譲歩をするやうになっただけで、最初からわざわざ大木の陰を求めて、村を作らうとしたのではあるまいと思ふ。」〔柳田 一九九八・二三四〕

「川の面貌を形づくる両岸の風物に至つては、その変遷が今一段と著しく、見るたびに景色が違つて居るといふ感じは、旅で通つてもよく経験する。大体に樹や叢の低く小さく又稀薄になつて行くことが、近代の傾向であることは争はれぬ。わざわざ流れのほとりに来て植栽する者は無いのだが、川が自然に運んで居た植物の量はもとは大きなものであった。それが採取ばかりが次第に進み、且つ頻繁なる此頃の出水に掃蕩せられると、川原はただ広々とした陽炎の遊び場に、化してしまはずには居られぬのである。」〔柳田 一九九八・三二六〕

上記の三点の視覚のうち、本稿の議論ともっとも関係が濃厚であるとみなされるのが(二)の生活様式へ遡及する観察である、それは、佐藤による次のような詳細な説明をとまうとき、論点の近接性はなおいっそうはつきりするであろう。「それは、いうならば風景を「むこう側から」とらえる眼だ。風景に感じている自分の感受を、むこう側から、すなわち

生活者の側から感じなおす記述の構築こそ、この思想家の方法の可能性の実質であり、それは「旅人」としての視覚を生活様式の記述へと変える変換装置であった」（佐藤 一九九四・一七五）。ここに、③で述べた高取正男の視覚の特徴である主観の共同性を重ね合わせることは、さほど無理は感じないであろう。生活者自身が民俗学することを願った柳田にとって「むこう側」と「こちら側」を分け隔てている壁を取り除く、あるいはそれを極力うすいものにするのが重要であったのかもしれない。あるいはその垣根を先ず自分が乗り越えて「むこう側」と「こちら側」を行き来するような視覚の方法を編み出すことが、民俗学の成立にとってひとつのインパクトとなつたと考えることができるのではあるまいか。いずれにせよそのようにしてできあがっていく視覚の方法は、主客未分の、あるいは彼我の別なき観察とでもいえよう。そしてそれは、柳田が構想していた調査法にアスペクト転換を引き込み、「むこう側」と「こちら側」が反転図柄のようになっていくことを意味したのではなかろうか。

もちろんそれ以外の風景論もまったく無縁ではない。それらは空間軸と時間軸を拡張しながら、「複数の景観に類似を見る」、「歴史的来歴と行く末を見ずえる」といった観察であり、前者は「〜に見える」の文法そのままである。（後者は、本稿ではじゅうぶんふれなかつたアスペクト知覚のもう一つのモードである「〜であることを見る」という文法に則っていることだけを付け加えておきたい）。このような点からも、柳田國男の視覚の方法、あるいはもうすこし広く民俗学的観察調査全般にも、アスペクト知覚としての側面を見いだすことは難くないのである。

⑤ 総括と展望

本稿では、可視的であることと理解可能であることはいかに関連する

のかという問題関心のもと、「way of looking」と「way of seeing」の対比、ならびにウィトゲンシュタインのアスペクト論に照らしながら、文化人類学と民俗学における観察＝視覚の方法を検討した。その結果、文化人類学や民俗学においては何ら先見性のない白紙の観察、あるいは比喩的に言えば裸眼での視覚というものは想定しがたく、むしろ場の論理としての文脈を反映したような観察法がなされてきたという帰結にたどりついた。しかしそれはバイアスや先入観といった一般的意味における障壁ではなく、観察調査においては不可避なものとしてそのポジティブな側面を最大化する方途を考案することが、むしろ必要となろう。その端緒として本稿で検討したのは、アスペクト転換を含むような観察を反映させた民族誌記述であった。それは現実と仮想が行き来する生活世界に肉迫する記述であるとともに、調査者（観察者）と対象者という関係性について、今後、別の角度からアプローチする足がかりになるのではないかと考えている。

そのためにも、当事者が可視化してものごとを理解する考え方（可視性によって知識を獲得していく側面）と、調査者（観察者）がその観察を確たるものにするために可視性に頼ること（調査法として視覚を行使して可視性をめざす側面）との関係を、さらに深く掘り下げる必要がある。民俗学における主観の共同性の問題について、主客未分や彼我の別なき境地といった主題に何の操作もへずに連接されると考えるのは、不用意で飛躍の誹りをまぬがれないであろう。しかし知識と可視性の問題については、本稿のタイトルとして掲げたことから明白なように、より包括的に議論すべき課題として今後に残されると考えている。

より「包括的に」という点では、知覚感覚の問題を視覚に限定せず、ほかの感覚との関連性において検討するという方向性が重要だと考えている。本稿でもふれたが、人間の感覚の中で視覚はとくに近代以降、中心的な位置を占めてきた。とくにフィールドワークや民俗調査を題材と

して考える場合、視覚の方法化である観察は、やはり議論の中心におかれるべきものであり、そのような設定上の限界は本稿につきまともつてい

る。それを乗り越えた視界をひらくことが当面の課題である。

また、視覚の方法化に限定して集中的に論じるのであれば、本来ならば本稿で中心に据えるべきことは、④の後半にとりあげたような個々の民族誌記述の事例において、視覚の方法がじっさいにはどのような対象把握の技法として行使され、いかなる解釈や理論に連繋していつているのかを吟味・検証することであつたかもしれない。しかしこの吟味・検証の前段階として、經由させるべき議論が膨大であつたため、(ふつうなら紙数がつきてしまったと書くべきであろうが)力つきてしまったというのが正直なところである。結果、民族誌記述そのものの検討は、本稿ではフイージビリティ・スタディーの域を出ないサンプル程度のものとなつてしまつたが、この部分はそれだけで別稿を用意しなければなるまい。続編はさらに続編へとつづくという予告だけはしておきたい。

【謝辞】

本稿は、二〇〇六年七月二九日に国立歴史民俗博物館共同研究「民俗研究の形成と発展」研究会において口頭発表した際の草稿をもとに、若干の加筆修正を施して文字化したものである。研究会にお招きいただき、発表の機会を与えてくださった小池淳一歴博准教授にお礼申し上げます。また筆者の口頭発表に対して、ご教示ご助言をくださった共同研究のメンバーの方々に(一人一人お名前はあげないが)感謝申し上げます。その方々の有益なコメントの多くは本稿に反映しきれなかったが、それはひとえに筆者の怠慢であると反省している。

註

(1) 大林は、「ここで近代的視覚というのは、遠近法のようなパースペクティヴとしての視覚という意味でも経験論者のいう感覚(sence)としての視覚という意

味でもなく、ニュートンの自然哲学の特徴である自然の数量化と数学化によってわれわれに見えるようになったヴィジョンとしての世界像というほどの意味である」(大林 一九九六・六一―六二)と述べている。

(2) 中村雄二郎は、「視覚は他の諸感覚にくらべて対象を客体化する働きが、よく対象そのものに密着している。しかも、視覚はほかの諸感覚の影響を受けて修正されることが少ない」(中村 二〇〇〇・一〇三)という理由から感覚組織が視覚優位に統合されているという見解に対して、反論を試みている。それによると他の感覚との協働を自覚化することが困難であるがために視覚の働きだと誤認してしまうこと、また、諸感覚の統合というとき求心的な動きが想定されており、その中心に視覚がおかれたことなどを指摘している。そして、求心的な統合よりも、体性感覚による遠心的な統合をより重視している。

(3) デイヴィスのこの仕事は、「Reflexive Ethnography」という著作にまとめられているが、本文での議論をふまえれば、「内省的民族誌」と訳すより、「自己言及的民族誌」と訳した方がより適当であろう(Davies 1999)。

(4) このような試みを行なうからといって、筆者が民族誌のフィールドワークのすべてをマニュアル化できると考えているわけではないことは明言しておくたい。とくに現地調査における観察は、ここで列挙する項目をすべて満たせば終了するものでもないし、観察項目を固定化することは、そもそも融通無碍なフィールドワークの基本的性格とはむしろ相容れないものであるかもしれない。ここではあくまでも仮定的手続きとして叙述したい。

(5) 一般的に出来事の記述は五W一H (who, when, where, what, why, how)を必須事項とすると言われるが、(1)ではhowのかわりにfor whom (誰に対して)という事項を盛り込むことが条件化されている。

(6) この項は、『環境民俗学』(山泰幸・古川彰と共編著、二〇〇八年、昭和堂刊)の第一章三節「民俗的自然認識論とアニミズム」の内容を、本稿の文脈に沿う形で、大幅に加筆を施して改稿したものである。

(7) そのことを逆用して、たとえば高座で落語家がしゃべっているのに、「あの人は落語家に見える」と言った場合、それは落語家ではない人を知覚し、その人が落語家の口調やしぐさをまねてあたかも落語をしゃべっているポーズを演じていると表現しているわけで、往々にして、存在と知覚のズレを強調することによってその落語家の芸の未熟さを揶揄する表現として用いられる。

(8) あるいはこれは「原因」と「理由」のちがいを説明している。たとえば「体調不良は末期癌のせいである」という場合の「せい」は原因を示しているが、「悲しいのは末期癌によって死期が近いせいである」の場合は理由としての「せい」である(野矢 一九九五)。そして原因は主観の介入しない観察によっても到達できるが、理由はつねに主観によって探索されるものであるという点で、この問

題は他者理解における主観と観察の関係の問題へも展開されるのである。

- (9) 「ペドウィン族の人びとが神を篤く信仰して、神が彼らにそなえている定めを深く信仰しているのは確かである」(「クレナイカのサヌシー族」)、「厳密な意味においてヌアー族には法律が欠けている」(「ヌアー族」)、「アザンデ族が自然の作用とみなせるものと、呪術、亡霊、および妖術の作用とみなせるものとの差異を認識していることは疑いない」(「アザンデ族の社会に見られる妖術、託宣、および呪術」)、「ヌアー族のあいだに明確に宗教的といえる感情が存在していると言えないことは確かである」(「ヌアー族の宗教」)、「まれな例外を除いて、ヌアー族の女性はその境涯に十分満足しており、彼女らの夫と他の男たちは彼女らを丁寧に遇していることがわかった」(「ヌアー族の親族と婚姻」)、「といった記述をさす」(「ギアーツ 一九九六・九〇」)。

- (10) アスペクトの問題に関して、野家啓一は「それは「真似」や「模倣」ができないこととして特徴づけられている。それを一言で「演技」を行なう能力と言え換えることができる」(「野家 一九九三・二九二―二九三」)と述べている。そしてこれは、エチオピアのザール信仰という特殊な事例においてのみ符合することではなく、われわれの日常世界が現実と仮想の単線的構成をとるのではなく、現実と仮想を往復しながら生が営まれていることに思いついたならば、それになるべく近い現実認識にもとづいて世界記述することがもともとリアルなのではないかという推測も成り立つ。

参考文献

ワイトゲンシュタイン、ルドヴィク 一九七六(一九五三)『哲学探究』(全集八、大修館書店)

大林 信治 一九九九「近代的視覚の形成―科学革命における観察と実験―」大林信治・山中浩司編『視覚と近代 観察空間の形成と変容』(名古屋大学出版会)、五八一―〇〇頁

川田 牧人 二〇〇五「目で見る方法序説―視覚の方法化、もしくは考現学と民俗学―」『先端社会研究』二・七三―九四

ギアーツ、クリフォード 一九九六(一九八八)『文化の読み方／書き方』(岩波書店)

クレーリー、ジョナサン 一九九七『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』(十月社)

佐藤 健二 一九九四『風景の生産・風景の解放 メディアのアルケオロジ』(講談社)

高取 正男 一九九五『日本の思考の原型』(平凡社ライブラリー、初版は一九七五年)

中村雄二郎 二〇〇〇『共通感覚論』(岩波現代文庫、初版は一九七九年)

生越 利昭 一九九九「視覚の社会化―「観察者」視点の生成と変容―」大林信治・山中浩司編『視覚と近代 観察空間の形成と変容』(名古屋大学出版会)、一四六―一八一

野家 啓一 一九九三『科学の解釈学』(新曜社)

野矢 茂樹 一九九五『心と他者』(勁草書房)

松園万亀雄 二〇〇二『民族誌と個性』『社会人類学年報』28

柳田 國男 一九九八(一九四二)『豆の葉と太陽』『柳田國男全集12』(筑摩書房)

山泰幸・川田牧人・古川彰(編著) 二〇〇八『環境民俗学』(昭和堂)

レリス、ミシェル 一九八六(一九七二)『コンダルのエチオピア人にみられる憑依とその演劇的諸相』『日常生活の中の聖なるもの』(思潮社)、一〇五―二六四

Davies, Charlotte Aull 1999 *Reflexive Ethnography*. Routledge

Grimshaw, Anna 2001 *The Ethnographer's Eye: Ways of Seeing in Modern Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schensul, Stephen L., Jean J. Schensul, and Margaret D. LeCompte 1999 *Ethnographer's Toolkit 2: Essential Ethnographic Methods*. Walnut Creek/London, New Delhi: Altamira Press.

Wolcott, Harry F. 1999 *Ethnography: a way of seeing*. Walnut Creek/London, New Delhi: Altamira Press.

(中京大学現代社会学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了)

Knowledge and Vision : “Way of Looking/Seeing” in Cultural Anthropology and Folklore Studies

KAWADA Makito

This article examines how the vision or looking/seeing relates to the process of acquisition and formation of knowledge by fieldwork. In association with the relativization of the assumption of “objective” observation in natural science, and the aspect of interaction and unification between subjectivity and objectivity observed there, this article explores the concept of “looking/seeing” in cultural anthropology and folklore studies. Its first basis is a comparison of the “way of looking” and the “way of seeing.” The former is a specific way of observing things, and the latter indicates interpretations of human and society that serve as background of individual techniques. This article examines how observational research especially of cultural anthropology is carried out in the field through both of the above modes of observation. It deals with the “cooperation of subjectivity” as a characteristic of observation in folklore studies. Observing nature, and feeling seasonal changes and determining the beginning period of farm work based on the observation of nature is generally an individual and subjective sense. However, in the “cooperation of subjectivity,” the subjective sense becomes cooperative among people within a certain range as seasonal idiomatic expressions and agricultural rituals. That simultaneously means the generation of a metaphoric vision such as “mitate” and “nazorae.” Thus, as the second basis for the study, the theory of aspects of Wittgenstein is examined, and the issue of context dependency in understanding of meaning is drawn. Based on this viewpoint, this article examines the descriptions in ethnography of Evans-Pritchard, and Michel Leiris, Kunio Yanagita, etc. Through those arguments, this article concludes that the characteristics of the observational method of cultural anthropology and folklore studies are not observations on a clean slate without any foresight, but rather observation conducted in the context as logic of the field, and understanding and descriptions that reflect the modification of aspects. Based on such mode of observation and description, this article closely examines the way of approaching the living world where reality and imagination come and go.

Key words: Methodology of vision, participant observation, way of looking, way of seeing, cooperation of subjectivity, aspect
